

Title	19世紀イギリスの哲学者ウェルビー による Significsの概念について
Author(s)	
Citation	令和2（2020）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書
Issue Date	2021-04
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80627">https://hdl.handle.net/11094/80627</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 令和2年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	さわい ゆうか 澤井 優花	学部 学科	文学部人文学科	学年	3 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	嘉目道人	所属	大学院文学研究科 文化形態論専攻		
研究課題名	19世紀イギリスの哲学者ウェルビーによるSignificsの概念について				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				

## 1. 研究目的

哲学者ビクトリア・レディ・ウェルビー (Victoria Lady Welby) は 19 世紀イギリスにおいて記号論を論じた哲学者である。英語圏における言語哲学の文献では、現代の言語哲学の議論に影響を与えたことがうかがえる彼女の記述が散見される。彼女はプラグマティズムの創始者で記号論者である C. S. パースとの書簡のやりとりでも知られている。それにもかかわらず、ウェルビーの哲学的な業績についての研究は英語圏でも蓄積が少なく、日本語での研究はほぼ存在しない。これらを踏まえ、彼女の記号論を独自のアイディアとして取り上げ、彼女の思想において中心的な概念 Significs の内容を整理することが本稿の目的である。

## 2. 研究計画・方法・経過

先行研究によれば、Significs とはウェルビーの提唱した記号の三項関係の総称であり、その三項とは「sense, meaning, significanse」である。しかしながらこの三つの分類の理解に研究者間の統一の見解があるわけではない。応募者は、ウェルビーの思想から言語の動的側面（文脈依存性など）に関する示唆が得られると考えており、その点を軸に研究を進めた。具体的にはウェルビーの一次文献を参照しつつ、二次文献における議論も踏まえながら Significs 概念を整理した。

## 3. 研究成果

## 3-1. 前期思想—聖典解釈

彼女の思想は主に前期と後期に分けることができ、前期には宗教的関心が、後期においては記号論 Significs に代表されるような言語哲学的関心が思想の多くを占める。本稿では記号論 Significs の概要を明らかにするという目標に向け、前期・後期思想のそれぞれを分析したのち、それらを接続するよう試みる。その理由は、ウェルビーの思想として注目されるのはもっぱら後期思想であるが、前期思想においても彼女の言語哲学の根幹をなす「解釈」について多くが論じられているように思われたためである。

ウェルビーの前期著作としてあげられるのは 1881 年に出版された *Links and clues* であり、ここでは聖書の解釈について論じられている。彼女はそこで四つの解釈原理を打ち出しており、それは（１）字義通りの意味、（２）高次と低次の原理、（３）文脈、（４）受肉の原理である。

第一の原理として「字義通りの意味」は、あくまで問題含みのものとして提起される。(Welby in Petrilli, : 87) 彼女は聖書の部分的な抜粋が全体として解釈不可能になってしまう例を挙げ、言語解釈においてはたとえ一つ一つの単語に明確な定義が与えられていようとも、全体として解釈不可能に陥る場合があることを示している。

さらに第二の原理「高次と低次の原理」について、ウェルビーは聖書で用いられる構文 “It was said... but I say unto you.” を例として用いながら、解釈にとって、古い解釈を単に棄却するのではなく、それを拡張することで新たな解釈を生むというプロセスが重要であるということを論じた。解釈においては低次の要素と高次の要素の止揚が重要な働きをもつのである。(Welby in Petrilli, : 87)

第三の原理「文脈」については、テキストの解釈には前の章や節、文章とのつながり、すなわち文脈を適切に参照することが必要であることが述べられた。さらに彼女は、それがどこで始まりどこで終わるのか、文脈の転換を見極めることの難しさについても言及している。(Welby in Petrilli, : 88)

第四の原理は「受肉の原理」であり、それは統一性の傾向を含みもつ。彼女によれば、完全なものに不完全なものを加えることで全体の質や価値が落ちると考えるのではなく、そうした完全さと不完全さの結合、受肉こそが真の完全さを生み出すのである。統一性への傾向としての受肉の原理は、第二の原理「高次と低次の原理」で説明された、高次の要素と低次の要素を結び付けるものとも言えるだろう。(Welby in Petrilli, : 88)

以上の議論を踏まえ、彼女の前期における主張は以下二点に要約される。（１）解釈には字義通りの意味のみならず、文脈の参照が必要である。（２）解釈には、低次の要素と高次の要素を止揚する必要がある。次節においてはウェルビーの後期思想を考察するが、こうした字義通りの意味への批判や文脈の必要性、解釈における複数の要素の止揚という観点は、言語における三項関係への分析を導くものとなる。

### 3-2. 後期思想—記号論 Significs と解釈の問題

ウェルビーの後期思想においては先にも述べた通り言語哲学的な関心が多くを占め、彼女の晩期著作である *What is Meaning ?* においては彼女独自の記号論 Significs が論じられる。ここではこの Significs 概念における記号の三分類 Sense, Meaning, Significance のそれぞれの内容を把握し、それらがどのように関係しているかを明らかにする。

*What is Meaning ?* でのウェルビーの目標は、言語学的な意味を超えて、すなわち歴史的、文法的、語彙論的、音声学的な側面を超えて意味の概念をより広く捉えることであった。具体的には、記号や言語の使用における心理的背景、文脈、意図、そして「暗黙の意味」、「意図しない意味」といった事柄に焦点を当てた。以下は、彼女の挙げる三項関係 Sense, Meaning, Significance の定義である。

(a)表現のもつ価値のうち第一のものは、当然のことながら、最も原始的な参照における感覚、すなわち環境に対する有機的反応と、すべての経験における本質的に表現的な要素と関連している。私たちは言葉の中で無感覚的なものを排除し、また言葉が使用されたり正当化されたりするのは、それが「どのような意味で」なのかを問うのである。

(b)しかし感覚 **Sense** はそれ自体目的ではない。これは **Meaning** という語のもつ特質である。この語は「伝えようと意図した」特定の意味のために用いられる。

(c)**Sense** と **Meaning** を含んでいるものの、その範囲を超越し、ある出来事や経験の広範囲にわたる結果、含意、最終的な結果や成果を包摂するものとして"**Significance**"という用語が効果的に用いられる。(Welby, 1911a : 79)

彼女が第一に掲げるのは **Sense** である。ウェルビーの用いる **Sense** は、基本的に有機的な、生物学的な意味合いで用いられている。ウェルビー研究者であるシュミッツの見解によれば、彼女の出発点は、感覚が人間の世界と動物の世界の間の重要な関連を表しているという進化論的見解である。ウェルビーは動物による周囲の環境の解釈を、原初的な記号解釈として捉えているのである。

さらにウェルビーによれば、**Sense** は「実際の使用に関わる言語」のことを指し、それは聞き手の周囲の状況や精神状態、関連性や談話全体 (Welby 1903 : 5) といった事柄が考慮された上で使用される言語をあらわす概念である。こうしたことから分かるように、**Sense** はコミュニケーションにおける聞き手側に焦点をあてる概念と言えよう。

そして **Sense** に続いて彼女が挙げるのは、**Meaning** である。**Meaning** の定義については比較的簡略で、それは先にも確認したようにある言葉が使用される際の話し手の意図である。

ある声明の **Sense** は、というよりむしろある声明がなされる際の **Sense** (これは **Significs** にとって重要な違いである) は私が想像するに、**Intention** のように意図的に伝えられる場合もあるかもしれないか、それは意図とは異なり、無意識のうちに不本意ながら示唆されるものであるかもしれない。[……] 言葉の **Meaning** とは、伝えようとされている意図——使用者の意図なのである。(Welby, 1903 : 5)

ここでウェルビーが指摘するのは、**Sense** が「無意識のうちに、不本意にも示唆されてしまうもの」であり、一方 **Meaning** は「意図的に伝えられるもの」であるということである。

続いて彼女があげるのは、第三項 **Significance** である。**Significance** は常に多様であり、その重要性、私たちへの訴え、感情的な力、理想的な価値、道徳的な側面、その普遍的または少なくとも社会的な範囲を表現することによって、その **Meaning** だけでなく、その **Sense** をも強める。

**Significance** はいくらか表現の「価値」に関わるものである。またシュミッツによれば **Significance** は聞き手の受け取った言葉の価値に関わる。彼によれば、**Significance** と呼ばれる表現価値は、話し手がこれを予測していたか、意図していたか、後になって認識したかどうかにかかわらず、聞き手が理解した言葉から推論できるあらゆる種類の結果に見出されなければならない。**Significance** は、「不本意に伝達される意味」すなわち **Sense** と、「意図された意味」すなわち **Meaning** をふまえた最終的な解釈として生じる価値なのである。

### 3-3. 考察—前期思想と後期思想の橋渡し

以上の議論を前期思想と接続しよう。先の章で確認した彼女の聖書解釈にまつわる主張 (1) 解釈には字義通りの意味のみならず、文脈の参照が必要である。(2) 解釈には、低次の要素と高次の要素を止揚する必要がある。を振り返るならば、(1) のような観察は、言語の「使用」に基づく言語分析、主に **Significs** のうち **Sense** と **Meaning** に関する分析の展開を導いたと言える。字義通りの意味

の失敗や、文脈の必要性といった初期の指摘が始点となり、言語の記号的側面を指す「言語的なもの」と言語の使用に関わる「感覚的なもの」という区別が下敷きとなって、書かれた言葉に限らず、具体的な言語使用に伴う「周囲の状況、心の状態、談話の領域、話者の意図」などの広範な言語分析が進む。こうした分析により **Significs** における第一項 **Sense** が特徴づけられる。そしてさらに、「意図されない、不本意ながら伝達される意味」と「使用者によって意図された意味」という区別によって **Sense** とは区別される第二項 **Meaning** が論じられるのであった。

さらに（２）の観察については、「**Sense** と **Meaning** が高次において止揚されたものとしての **Significance**」というアイデアに引き継がれたものと思われる。「高次と低次の原理」や「受肉の原理」といった聖書にまつわる解釈原理が解釈の止揚を説いたのと同じような仕方で、話し手側の意図や言語使用における状況など、言語の複数の側面が **Significance** において止揚されることにより、私たちは記号の解釈における美的価値、道徳的価値について論じることが可能となるのである。

本稿ではウェルビーの思想を前期と後期に分類し、前期思想での聖書解釈に関する彼女の見解と、後期思想における記号論 **Significs** のアイデアとの接続を試みた。結果として、ウェルビーの記号論 **Significs** の三項がいかなるものであるかは上記の通り示された。同時に彼女の思想が、「聖書」と「聖書の解釈者」という二者関係から、「話し手」と「聞き手」によるコミュニケーションへと分析対象を変えながら、言語使用とそれに伴う価値の問題を論じる、記号理論に留まらない広範な言語哲学であることが明らかとなった。

#### 参考文献

- Nerlich, Brigitte, and David D. Clarke. (1996). *Language, Action and Context: The Early History of Pragmatics in Europe and America 1780-1930*. John Benjamins Publishing Company.
- Petrilli, Susan. (2009). *Signifying and Understanding. Reading the Works of Victoria Welby and the Signifying Movement*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Schmitz, H. Walter. (1985). *Victoria Lady Welby's Significs : The Origin of the Signific Movement*. In Welby, V. (1985 [1911]). *Significs and language. The articulate form of our expressive and interpretative resources*. Amsterdam: John Benjamins.
- Welby, Victoria. (1881). *Links and Clues*. In Susan Petrilli (2009). *Signifying and Understanding. Reading the Works of Victoria Welby and the Signifying Movement*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Welby, Victoria. (1896). *Sense Meaning Interpretation*. In Susan Petrilli (2009). *Signifying and Understanding. Reading the Works of Victoria Welby and the Signifying Movement*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Welby, Victoria. (1903). *What is Meaning? Studies in the development of Significance*. Amsterdam: Benjamins. (Reprint of 1903, London edition, introductory essay by Gerrit Mannoury, Preface by Achim Eschbach)